



日本文学全集 44



松本清張

球形の荒野 他



河出書房

日本文学全集 44 松本清張



© 1973

責任編集

武者小路実篤 川端康成
石坂洋次郎 山本健吉
瀬沼茂樹

昭和43年9月20日 初版発行
昭和48年6月20日 7版発行

著者 松本清張
発行者 中島隆之
印刷者 草刈龍平
装幀 原弘
印刷 中央精版印刷株式会社
製本 中央精版印刷株式会社

発行所 東京都千代田区 株式会社 河出書房新社
神田小川町三の六
電話東京(292)大代表 3711
振替口座 東京 10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします
定価はカバー・帯にあります

目次

球形の荒野……………三

千利休（「小説日本芸譚」より）……………三七

光悦（「小説日本芸譚」より）……………三四三

年譜……………三五九

文学入門……………三六五

作家の横顔……………三七五

有馬頼義……………三七五

球形の荒野

1

芦村節子は、西の京で電車を下りた。

ここに来るのも久し振りだった。ホームから見える薬師寺の三重の塔も懐かしい。秋も深くなって、塔の下の松林におだやかな陽が落ちてゐる。ホームを出ると、薬師寺までは一本道である。道の横に古道具屋と茶店を兼ねたような家があり、戸棚の中には古い瓦などを並べていた。節子が八年前に見たときと同じである。昨日、並べたとおりの位置に、そのまま置いてあるような店だった。

空は曇って、うすら寒い風が吹いていた。が、節子は気持が軽くはずんでいた。この道を通るのも、これから行く寺の門も、しばらく振りなのである。

夫の亮一とは、京都まで一緒だった。亮一は学会に出るので、その日一日その用事にとられてしまう。旅行に二人で一緒に出るのも何年ぶりかだ。彼女は、夫が学会に出席している間、奈良を歩くのを、東京を発つときか

らの予定にしていた。

薬師寺の門を入って、三重の塔の下に立った。彼女の記憶では、この前来たときは、この塔は解体中であった。そのときは、残念がったものだが、いまは立派に全容を顕わしていた。いつも同じだが、今日も、見物人の姿がなかった。普通、奈良を訪れる観光客は、たいていここまでは足を伸ばさないのである。

金堂の彫刻を見終つて外に出たのが、ひるすぎであった。あとの都合で、時間の余裕がないので、彼女は早々に薬師寺を出た。

薬師寺から唐招提寺へ出る道は、彼女の一番好きな道の一つである。八年前に来たときは晩春で、両側の築地塀の上から、白い木蓮が咲いていたものだった。この道の脇にある農家の切妻の家に、明るい陽が照つて、壁の白さを暖く浮き出していた。が、今日は、うすく曇つて、その壁の色が黝く沈んでいる。

相変わらず、この道には人通りが無い。崩れた土塀の上には、蔦が赤く匍つている。土の落ちた塀の具合も、置物のように、いつまでも変わらないのである。農家の庭で、糶をこいていた娘が節子の通るのを見送った。

唐招提寺に着くと、いつの間にか門がきれいになっていた。

そういえば、ずっと前に来たとき、この門はずいぶん

荒れていた。ほとんど柱の下が朽ちかけて、苔のある古い瓦を置いた屋根が、不安定に傾いていたのだ。しかし、あのときは門のそばに山桜が咲いて、うすく朱の残った門柱の上部にそれがよく似合い、ふしぎに「古代の色」といったものを感じさせたものだった。

金堂までは長い道を歩かねばならない。両側は木の多い場所だった。受付の小さな建物も節子が八年前に来たときと同じである。通りがかりにのぞくと、絵葉書やお札を売っている老人がいた。

節子は、まず、金堂を眺めた。大きな鴟尾しびを載せた大屋根の下には、吹放しの八本の柱が並んでいる。いつ来ても、この円柱の形は美しい。法隆寺を思い出すような、ふくらみのある柱だったし、ギリシャの建物にあるような形なのである。

軒の深い金堂の横を歩いて、裏側にまわった。

鼓楼どろうも講堂も、あのときから修理したものらしく、朱の色が新しくなった。この位置から見る唐招提寺の布置くらしい美しい眺めはない。なにか、雅楽のリズムを聴いているような感じであった。

節子は、しばらくそこに佇たてずんだ。人ひとり、見物に来るものがないのである。

雲がすこし切れて、うすい陽の光線が洩れた。八本のエンタシスの柱は、影を投げて一列に見事な立体をつく

った。軒が深いので、日射しは途中でさえぎられ、上部の軒まわりは、やはり暗いのである。青い櫺子窓れんじまどや、白い壁を奥行に沈ませて、朱の円柱だけが明るいの。節子は、そこでしばらくうっとりとして眺めた。

節子に、古い寺の美しさを教えたのは、いまは亡き叔父であった。叔父は母の弟で、外交官だった。野上頭一郎という名で、戦時中、ヨーロッパの中立国の公使館で一等書記官だったが、終戦にならぬうち、任地で病を得て死んだ。

母が歎いて、あんな頑丈がんじょうな身体の人が、と言ったのを節子は憶えている。当時、彼女は二十三歳でいまの夫と結婚して二年目だったが、叔父のことを考えると、この母の言葉が一しよに耳みみに蘇よみがえるのである。

それほど、叔父は体格がよかった。中学校から大学まで柔道をやってきた男で、三段であった。叔父が日本を発つときは、戦争が激しくなっているときで、母と彼女は、燈火管制でうすぐらくなっている東京駅に叔父を見送りに行ったものである。すでに欧州へ行く道はシベリア経由によるしかなかった。

日本はアメリカの機動部隊に痛めつけられているときだったが、ヨーロッパでもドイツやイタリーが敗退をつづけていた。中立国だし、任地に無事に着きさえすれば、叔父は安全だと思われたが、思ってもみなかった病

魔に彼は^た仆れたのである。

日本や、独、伊の敗色が濃厚になってきたときなので、叔父は、中立国に駐在して、むずかしい外交任務に従っているうち過勞となり、胸を患^{やぶ}って死んだのである。当時、叔父の死を報じた日本の新聞にも、

「中立国に在って、複雑な欧州政局の下に、日本の戦時外交の推進に尽力、遂に、その職に仆れたものである」

と記事が出ていて、節子は、まだ、憶えている。

体格のいいこの叔父が、節子に古い寺の美しさを教えたといえる。叔父は、学生時代からも、たびたび奈良の古寺や大和路を歩いてしたが、外務省に入ってから、それは欠かさなかった。殊に、領事官補となって天津を振り出しに、欧州各地に在勤したが、本省に帰ると、まず最初に、大和路を歩くのであった。

節子は、この叔父に、実際に関西に連れて行ってもらったことはなかった。

「節子、いつか、連れて行ってやるぞ。叔父さんが、詳しく説明してやるからな」

叔父は、以前からそういいながら、遂にその機会を失ってしまった。

海外勤務になると、叔父は在勤先から、外国の美しい絵はがきを節子に送ってくれたが、外国の景色の美しさ

は一行も書かず、

「奈良の寺に行ってみたか。飛鳥の寺にもぜひ、行きなさい。叔父さんも近かったら、休暇をもらって行くところだが」

などと書かれてあった。叔父は、外国に居るだけに、余計に、日本の古い寺に憧れていたらしかった。

節子が、その後、古い寺に興味をもつようになったのは、その死んだ叔父の影響だった。

金堂を見終って、節子は出口に歩いた。

彼女は、守札や絵葉書などを売る受付の小さな建物に寄った。ここで東京への土産に何か扱^あび、従妹の久美子に持って行ってやりたかった。それは久美子の父への思い出のつもりだった。そこには絵葉書にまじって、壁かけになっている小さな焼物が置いてある。「唐招提寺」の四つの文字が配列してあるのが記念になりそうだった。節子はその皿を求めた。

老人が品物を包んでいる間に、節子は、ふと、そこに置かれてある芳名帳が眼についた。和紙をとじた厚いものである。ちょうど開いたままだったもので、なにげなく眺めていると、雑誌などで見る有名な美術評論家や、大学教授などの署名があった。やはり一般の観光客が来ないかわりにこのような人たちが寄るものとみえ

る。

老人は、皿を包むに手間どっていた。節子は、芳名帳の一枚うしろをめくった。一めんにも名前が記帳してある。さまざまな名前が、文字のくせを現わしていた。近ごろは、筆の字となると誰も書きづらいらしく、達筆なものもあるが、ひどく下手なものも多かった。

が、その中の一つの名前に、彼女の視線がとまった。

「田中孝一」というのである。むろん節子の知った名前ではない。彼女がそれに眼をとめたのは、未知の人の名前ながら、どこかで、その文字に遭ったような気がしたからである。どこかで――

「ありがとうございます」

老人はやっと包みを紐でくくって差し出したが、節子が芳名帳の名前に見入っているのを、

「奥さまも、ひとつ御記帳願えませんか」

とすすめた。

せっかく、この寺に来たことだし、節子も筆を借りる気になった。それから自分の名前を書き了ってからだだったが、もう一度、前の紙を繰った。どうも気になるのである。この名前にではなく、その文字のくせにであった。

なんとなく、死んだ叔父の筆蹟に似ているのである。叔父は、若いときから文字が上手な方だった。いま、

この筆の字を見て思い出したのだが、そのやや右肩上りの癖といい、「一」と横に引っぱった筆のとまり具合といい、叔父の手蹟によく似ていた。つまり叔父の名前の頭一郎の、「一」と、この田中孝一の「一」の筆づかいが、共通しているのである。叔父は若いときから、北宋の書家米芾を手本にして習っていた。

節子は、この寺に来て、死んだ叔父のことをあまりに考えていたので、そんな錯覚を起したのかと思った。世の中には、似たような文字を書く人はずいぶん多いが、偶然叔父の好きなこの寺に来て、叔父によく似た文字を発見したのは、やはり彼女にはうれしかった。何処の誰だかむろん住所が記載してないので、節子には分りようがなかった。

それでも彼女は、懐かしくなつて、念のために老人に訊いてみた。

「この方は、やはり遠くからおいでになつた方ですか？」

老人は興味なさそうに田中孝一の名前をのぞいてみた。

「さあ、知りまへんな」

と答えた。

「このページに書かれた名前の方は、いつごろここにおいでになつたんでしょう？」

節子は、さらに訊いた。

「そうでんな」

老人は眼をしよぼしよぼさせて署名の順序を見ていたが、

「十日ぐらい前のように思いますな」

十日前というのと、この老人は、記帳の参詣人を覚えてゐるかもしれない。ここには観光客もあまり来ず、忙しくないはずである。

しかし、そのことを老人にただと、

「いえ、けっこうお詣りがありますよってに、いちいち、どないな方が覚えてしまへん」

と、ぼそりと答えた。

節子は、諦めて、そこを離れた。もとの、来た道を帰るのだったが、なぜか今日は、叔父のことが想われてならなかった。古い寺の美しさに眼をあけてくれたのが叔父だっただけに、この寺に来てそれは当然だったが、亡くなった人のことを考えるのは、あるいは秋の寺を観たせいかもしれない。

節子は、夫と、今夜、奈良の宿で落ち合う約束だった。京都で学会をすませた夫は、八時には奈良に入ると言っていた。雲の加減で遅いようだが、二時をまわったばかりだった。来るときは気がつかなかったが、隣の村に、一ぱいに実っている赤い柿が、眼に入った。

節子は、また西の京の駅に戻った。奈良へすぐに帰る

のだが、なぜかそのときになって、心がはずまなかった。最初の予定はいろいろと組んである。たとえば秋篠寺から法華寺に廻る佐保路のあたりを歩いてみたかった。が、急に気が乗らなくなったのである。節子は、田中孝一という人のことがまだ気にかかっていた。もちろん、知らない人である。が、その人の書き残した文字が、妙に頭の中から消えなかった。

節子がホームにたたずんでいると、上りの電車が来た。当然、最初の予定ではこれに乗るはずだったが、心のためらいは、ついその電車を見送った。

このときになって、節子は決心した。彼女はホームを変えて、折りから来た下りの電車に乗った。

電車の窓から見ると、一めんの平野は枯れた秋の風景を見せていた。取り入れがすんで、さむぎむとした田の面が拡がっていた。丘陵を背景にして、法起寺のくすんだ三重の塔が見えたが、やがて法隆寺の五重塔が、鮮かな色で、松林の中に立ち現われてきた。

節子は、橿原神宮前駅で下りた。

タクシーの走っている道は寂しかった。

両側が広い平野で、農家が部落をつくって点在しているだけだった。岡寺をすぎて、橘寺の白い塀が正面に見えた。節子は、運転手に待って貰うように言い、寺の高

い石段を上った。

橘寺は、小さな寺である。彼女はこの寺の名が好きだ。節子は、本堂から横の受付の窓口に行った。そこでも守札や絵葉書を買っていた。

節子はそこで絵葉書を買ひ、そのへんを見まわしたが、芳名帳はなかった。

「恐れ入りますが」

彼女は思いきって言った。

「芳名帳がございましたら、記名させていただきますのですけれど」

法帖を手習いしていた受付の坊さんは、節子を見上げしたが、自分の机のわきから、だまって芳名帳を差し出した。

節子は、急いで最後の部分から繰った。しかし、「田中孝一」の名前は見あたらなかった。彼女は自分の名前を書き、念のために前の紙を繰った。が、やはり何度見ても、「田中孝一」の名前は無かった。

「どうも」

節子は芳名帳を返した。

石段を下りて、待たせてあるタクシーに乗った。

「どちらへ？」

運転手は、振り返って聞いた。

「安居院あんきんに行つて下さいな」

運転手は、車をまた走らせた。道は、やはり稻を刈つた田圃の中である。先ほど橘寺から眺めた森が近づいてきた。節子は、安居院と書かれた門の前で、車を下りた。ここでも運転手に、待ってくれるように念を押した。

安居院の門に入ると、金堂はその横にあった。礎石らしい大きな石が、庭にある。

この金堂の本尊は、止利とまり仏師ぶつしといわれる飛鳥大仏である。美術史といったぐいの写真でさんざんお目にかかっているが、いまの節子は、「古拙こせつの笑い」を泛ひろべた本尊を急いで拝む気はなかった。ここでも、先ず、芳名帳を見せてもらいたかったのである。

寺の受付には、誰も居なかった。そういえば、ここは奈良の諸寺から見ると、ひどく佻ひょうしい。節子がそこに佇んでいるのを見たのか、庫裏の方から、五十くらいの方さんが、白い着物を着て出てきた。

「拝観はいくわんでつか？」

坊さんが首をのばして言った。

いつもの節子だったら、本尊を拝観するところだったがいまは別のことが気になっている。彼女は守札と絵葉書だけを買った。ここでは、要求するまでもなく、芳名帳はその受付の窓口まぐらに置いてあった。

「あの」

節子は、坊さんに言った。

「東京からこちらにわざわざ来たものですから、芳名帳に名前をつけさしていただきたいのですが」

坊さんは、節子の顔に笑いかけて、

「さあ、どうぞ、どうぞ」

とすすめた。自分で硯の墨をすってくれるのである。

節子は、芳名帳を開いた。和尚が墨をすっている間に見たのだが、最後の一枚には三人の名前しかなかった。

前の一枚をはぐった。そこにも縁のない他人の名前が並んでいた。しかしもう一枚をめくったとき、思わず声が出そうになった。

そこには、見覚えの「田中孝一」があったのである。

字体も、唐招提寺で見たとときと、判を押したように同じであった。墨をすって出してくれた坊さんに、節子は聞いた。

「ちょっと伺いますが」

田中孝一の名前に指を当てた。

「この方は、いつこちらに御参詣になったんでございましょう？」

自分の知った人を訊くような調子だった。

坊さんは、かがみ込んで名前を見ていたが、

「さあ」

と首を傾け、

「分りまへんなア。この寺もお詣りの方が多いよってに」

と、考えながら言った。

「いつのことでっしゃるな。そのへんについているのやったら、一週間か十日か前でっしゃるな」

節子はそれを聞いて坊さんの顔を見つめた。

「和尚さんは、この方を覚えていらっしゃいませんかしら？」

坊さんは、また首を傾げた。

「どんなお方やったか、覚えてまへんなア。そら、なんぞあんさんのお知り合いのお方でっか？」

「そうなんです」

と彼女は思わず言ってしまった。

「これを拝見して、長らく会わなかった方を思い出したんです。それでお訊ねするんですけれども」

「さあ」

坊さんは顔をしかめて考えていた。

「どうも、わての記憶にはおまへんな。女房もおりますさかい、ちょっと訊いてあげましよう」

親切な住職だった。わざわざ細君のところまで問い合せに行ってくれた。

戻ってきたときは、その妻と一緒だった。話を聞いたとみえ、その主婦は節子に会釈して芳名帳の田中孝一の

名前を見た。

「へえ、わてにも、よう分りまへんなア」

坊さんの妻も、亭主と同じように首を傾けていた。

節子は、もう一度、芳名帳の文字に眼を戻した。いかにも叔父の文字によく似ていた。

節子は、叔父から貰った書を何枚か持っている。子供の時きだったので、あまりむつかしい漢詩ではなかった。叔父は趣味で、赤いもうせんなどしいて唐紙をのべ、叔母に墨をすらせて、大きな筆で漢字を書いたものだ。いまここに叔父の書を持っていたら、「田中孝一」の筆蹟と較べてみたいくらいだった。

節子が奈良に入ったのは夕方だった。街に明るい灯がついていた。駅前からタクシーを走らせた。黄昏どきの公園通りの人通りは少なくなっていた。興福寺の塔に、下から照明がきれいに当っているのが見えた。

宿は、夫と打ち合せて、飛火野のあたりにとつておいた。その宿に着くと、夫の亮一は、先に到着して、もう風呂から上っていた。

「済みません。遅くなりました」

節子が詫びると、夫は、ちかごろ肥えてきた身体を丹前に包んで、丸くなって新聞をよんでいた。

「君、風呂はどうする？」

夫は、節子を見ると言った。

「あとで頂きますわ」

「それじゃ、早速、飯にしよう。腹が減った」

夫は、子供のように腹を叩いた。

節子は、すぐに女中に夕食を頼んだ。

「あなた、京都はわりにお早かったのね？」

節子は夫に言った。

「ああ、早く済んだ。あとで親しい連中で、懇親会をするのだが、ほくは酒が飲めないし、それに君がこっちに待っているの、その方は切り上げて来た」

節子は、自分が遅れたのが、よけいに済まなくなつた。

「ほんとうに悪かったわ。ごめんなさい」

「いいよ。それよりも」

亮一は節子の顔を、にやりと見て、

「君の古寺巡礼の話でも聞こうか」

と言った。夫は節子の趣味をひやかしていた。

食事が来た。

酒の飲めない亮一は、食事には手が要らなかつた。早速に飯にしながら、皿の料理を片はしから片づけはじめた。

「あら、ずいぶん、お腹、空いてらしたのね！」

節子は、夫の様子を見て微笑した。

「おいおい」

と夫は言った。

「話が変わだよ。君は叔父さんを探して歩いたわけではあるまい。よく似た筆蹟ということだけだろう？」

「それは、そうですね。叔父は十七年前に死んだんですもの。でも、ちゃんと安居院で、同じ筆蹟を発見しましたわ」

「やれやれ」

と夫は言った。

「女の直感というのは恐ろしいものだね。その叔父さんの筆の亡霊を騙ったのは、何という名前の人がい？」

「田中孝一という名前です。それがほんとによく似ているんです。叔父は北宋の米芾の書を手本にしていますから字体に特徴があるんです」

「田中孝一氏も、同じシナの書家を師匠にしていたのだつたら、罪なことを君にしたものだね。君に予定を変えさせて、安居院に走らせたのだからね」

茶をのんでから、夫は笑った。

「地下の叔父さんは喜ぶだろう。そりゃ、ご苦労さまだった」

すぐ横が飛火野だから、夜は静かなものである。雨が落ちて来たらしく、廂に音がしていた。

夫には嗤われたが、節子は、「田中孝一」の字体が、

いつまでも眼に残って離れなかった。

今日ほどヨーロッパで病死した叔父の想い出に纏わられたことはなかった。

2

節子は、東京に帰って二日目に、叔母の家を訪ねて行った。

叔母の家は、杉並の奥の方にあった。そこは、まだ、ところどころ、武蔵野の名残りの櫟林があった。近くには、ある旧貴族の別荘がある。その邸は、ほとんど、林の中に包まれていた。節子は、この辺の道を歩くのが好きである。

新しい家も、ふえていた。そのために、次第に、彼女の好きな林が失われて行くのである。それでも、旧貴族の別邸の辺りは、櫟、檉、樺、樺などが高々と空に梢を張っていた。

秋はことに美しかった。籬の奥に、武蔵野の名残り、林のままに残っている家もある。

叔母の家は、そのような一角にあった。どの家も古い。狭い道が杉垣の間を曲りくねっていた。初冬になると、この狭い小道の両端に落葉が溜って、節子が歩くのを愉しませた。

節子が小さな家の玄関の前に立ってベルを鳴らすと、